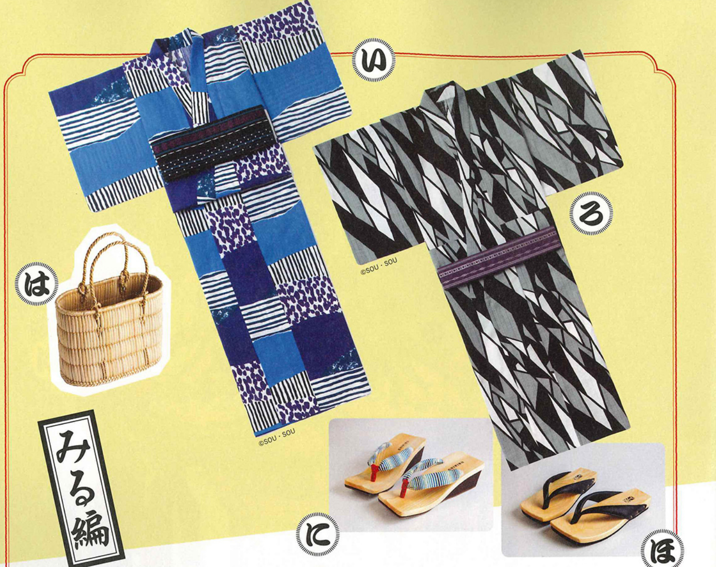
THE MATSURI

ザ・祭 Selection

祭りに華、粋な装い。
祭りに箔、粋な道具。
粋づくしの
〝プロダクト祭〟、
ご覧あれ。

©SOU・SOU　撮影協力：星のや京都



みる編

SOU・SOUの浴衣

「新しい日本文化の創造」がコンセプトのSOU・SOUは、和のモチーフをポップに表現したテキスタイルで人気のブランド。「京都丸紅」とコラボした男女の浴衣は、江戸時代に愛知県の知多半島で織られるようになった「知多木綿」で仕立てている。シャトル織機で織った柔らかい風合いの生地に、大胆な色味や柄が美しい。

い：SOU･SOU ×京都丸紅　浴衣
東山三十六峰縮景 紫翠　32,400円（帯は別売）
ろ：SOU･SOU ×京都丸紅　浴衣
薄氷景色 勝　27,000円（帯は別売）

SOU・SOU 着衣
京都市中京区新京極通四条上ル中之町 583-6
http://www.sousou.co.jp/

蒜山がま細工の手提げ

岡山県北部の蒜山地方に伝わる「がま細工」は、660年以上前、湿地に自生するガマで兵糧を運ぶ背負かごを作ったのがはじまりとされる。雪深い地域の、冬の間の手仕事として受け継がれてきた。熟練の女性職人たちが、シナノキという木の繊維でよった小縄で、ガマを編む。ガマは軽量で防水性にもすぐれる。頑丈に作られた手提げは、素材の経年変化も味わいになる一生モノだ。

は：蒜山がま細工手提げ小　12,960円

くらしのギャラリー本店
岡山市北区問屋町 11-104
http://okayama-mingei.com/

mizutoriの下駄

昭和12年創業の下駄メーカー「水鳥工業」は、サンダル・シューズの中底の製造を経て、デザインと履き心地を兼ねそなえた下駄を自社で開発。洋服とコーディネイトしやすい履物というニーズを生んだ。商品は、静岡県産ヒノキを使用。美しい木目とさらっとした肌ざわりが特徴。鼻緒にクッション材をいれたり、足裏にフィットさせたりと履き心地を追求している。

に：SH-16 縞縞（m2）／藍輝く・ワイン／
SHIKIBU 19,440円
ほ：SA-05 スムース革／ブラック／茶人 14,580円

mizutori / 水鳥工業
静岡市葵区平和 1-18-22
http://geta-shop.jp/

「祭りに浴衣」のいま昔

最近、祭りの会場では男性の浴衣姿もよく見かける。イベントを楽しむ嗜好性の現れだろう。

そもそも、浴衣で祭りに出かける習慣は江戸時代にはじまったといわれる。木綿が普及し、銭湯文化も広がって夕涼みに着用。同じころ、盆踊りや風流踊りも流行し、浴衣を着て出かけたという。

明治、大正と夏の日常着になったものの、日中、外へ着ることははばかられていた。昭和初期の新聞記事にも「昼間に浴衣を着ることに良識を疑う」とある。

昭和中期以降、昼間の外出着として徐々に認められるようになり、シルク、ポリエステルといろんな素材が登場し、色柄もにぎやかに。一気に花開いたのが平成だ。ギャル文化とともに、浴衣ブームが起きる。暗闇で光るもの、フリル、ミニ丈などが登場。以降、各ブランドがシーズンごとに発表するようになった。

最近はシンプルな古典柄、上質な木綿や麻（リネン）も見なおされている。昼夜も世代も問わず、祭りに浴衣の文化はますます広がりそうだ。

※税別表記以外はすべて税込

文・編集：ハタノエリ　写真（一部除く）：丹生谷千聡

本中、大風呂敷を広げて踊れ

OCT 2018 | Vol.31【ターンズ】

TURNS

これからの地域とのつながりかた

まちには祭りが必要だ！

大友良英さん「祭りが生まれる瞬間に立ち会う」／ ターンズが選ぶニッポンの祭 ／ 愛しのかき氷